In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

『大江山酒呑童子』（保昌屋敷の段）復曲演奏に関する覚え書き： 文楽と淡路座の近代

久堀　裕朗

Citation	伝統芸能の近代化とメディア環境. pp.1-16.
Issue Date	2018-03-31
Type	Research paper
Textversion	Publisher
Rights	For personal use only. No other uses without permission.
doi	10.24544/ocu.20191223-002

Placed on: Osaka City University

久堀裕朗. “『大江山酒呑童子』（保昌屋敷の段）復曲演奏に関する覚え書き： 文楽と淡路座の近代”. 2017年度「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書「伝統芸能の近代化とメディア環境」. 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター, 2018, pp.1-16. https://doi.org/10.24544/ocu.20191223-002.

二〇一七年度「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書

伝統芸能の近代化とメディア環境

大阪市立大学大学院文学研究科　都市文化研究センター

Urban-Culture Research Center

『大江山酒呑童子』（保昌屋敷の段）復曲演奏に関する覚え書き
――文楽と淡路座の近代――

久堀裕朗

はじめに

本プロジェクトの報告会として開催された公開報告会・演奏会「伝統芸能の近代化とメディア環境」（平成三十年三月二十四日・大阪市立大学学術情報総合センター一〇階大会議室、本稿末尾にポスターを添付する）において、『大江山酒呑童子』保昌屋敷の段が竹本友庄・鶴澤友吉（淡路人形座）のお二人によって素浄瑠璃で演奏された。この復曲演奏は、公益財団法人淡路人形協会（淡路人形座）の協力を得て、本プロジェクトの一環として、演奏者と筆者が協同して取り組んだ課題である。ここにその上演台本、復曲の内実、本作の伝承などについて記し、今回の復曲演奏に関する覚え書きとしたい。

一、『大江山酒呑童子』について

『大江山酒呑童子』は『酒呑童子話（しゅでんどうじむかしがたり）』の改題で、『酒呑童子話』は文化十一年（一八一四）初演された多段構成（続十一冊〈初演番付〉）の時代物浄瑠璃である。作者は佐川藤太・吉田新吾であるが、正本末尾の作者連名に「添削」と添え書きされているように先行浄瑠璃の改訂作品で、延享三年（一七四六）初演の『酒呑童子出生記』に多くの部分を拠っている。保昌屋敷の段もその内容はほとんど『酒呑童子出生記』三ノ切に等しく、ところどころ文句を変え、適宜カットしつつ短縮したものである。『酒呑童子出生記』については、近時、細川久美子氏が「近松以後の酒呑童子物浄瑠璃（前）―『酒呑童子出生記』―」（『演劇研究会会報』第四十三号、二〇一七年四月）に詳しく述べておられるので参照されたい。

今回の演奏では原題『酒呑童子話』を取らず、改題『大江山酒呑童子』を用いている。その理由は後述するが、保昌屋敷の段については初演の後に改訂が加えられているようなことはなく、内容は初演時の『酒呑童子話』そのままである。以下にまず『大江山酒呑童子（酒呑童子話）』の保昌屋敷の段と、この段の理解に関わる部分について、梗概及び人物相関図をまとめておくことにする。

○保昌屋敷の段に至るまでのあらすじ

平安時代のこと、坂上是則（さかのうえのこれのり）は吉野山で美女に出会い、吉野の前と名付け、妾として都に連れ帰る。（吉野山の段）

やがて是則の本妻有明（ありあけ）御前と吉野の前はともに懐妊するが、三年経っても出産の気配がない。有明御前が安産祈願のため北野天満宮参詣の折、

有明に横恋慕している氷室左大将定頼（幼い天皇に代わって権力を握っている帝の伯父鞍馬皇子の側近）に絡まれる。有明は定頼の家来の刀をもぎ取り、定頼に斬りつけて額を傷つけてしまう。折から吉野が出産したとの知らせがあり、ほどなく有明も出産する。（北野社の段）

有明御前は定頼に傷を負わせた後、是則の手配で加賀の国に産子とともに落ち延びる。是則はその罪によって一年余りの間、閉門を命じられ、吉野とともに館に籠もっている。吉野の産み落とした子は故郷の縁者のもとに預けられている。上使として源頼光の家臣が来て、是則は一旦死罪に決まったが、主人頼光の進言によって丹後国成合に流罪になったと伝え、成合は平井保昌の預かりなので身の上に気遣いはないと言う。定頼からの討手が来るが追い散らし、是則は丹後へ、吉野は故郷へ向かう。（是則館の段）

有明はその後、京都の矢背（八瀬）の里に戻り、身を隠している。成長した息子の般若丸は比叡山に児法師として預けられていたが、母に会いたいと戻ってくる。酒を飲んで悪念を募らせる般若丸を有明は牢に入れる。そこに師の善覚阿闍梨が来て、破戒の弟子に意見する。しかし般若丸は牢を破り、阿闍梨を殺すと、大江山の千丈が嶽に行って酒呑童子と名乗ると言い、空に飛び去る。（やせの里の段）

〈保昌屋敷の段・口〉

丹後国成合の平井保昌屋敷。吉野の前が子供を連れて保昌屋敷を訪れている。配所住まいの是則の見舞いに行っていた保昌が戻り、妻の和泉式部に、頼光からの飛脚が来て是則に自害させよとの命令が下ったという連絡があったことを告げる。「用意肝要たるべし」との頼光の文面に、何とか対処せよとの含意を読み取り、二人は思案に暮れる。吉野が訪ねてきたと聞いた是則がほどなく屋敷に来て、式部とともに吉野に対面する。吉野は故郷の縁者のもとで一年余り暮らした後、その家を出て深山住まいで子供を育てていたと言う。三人は子供の寝ている離れ座敷に向かう。

〈保昌屋敷の段・切〉（今回の演奏部分）

矢背の大原女が来て、急ぎの願いと言い、保昌に会う。女は有明御前に仕えていた者と名乗り、有明が自害したので遺言によって首を届けに来たと言って、風呂敷包みの中から一つの器物を差し出す。続いて奥より腰元が出て、同じく器物を差し出し、これは吉野様からの土産物と言う。保昌が中身を確かめると、どちらも何も入っていない。その意味を思案した保昌は、心中で頷き、「双方ともに落手した」と言って奥に入る。

大原女は実は有明自身で、是則の難儀を救うために自分の首を差し出してほしいとの謎をこめて、空の器を差し出したのだった。有明は出産時に吉野と取り替えた我が子（産み落とすとすぐに、双方妬みそねみのないように子供を取り替えて育てていた）の顔を見るために奥に入る。

後に吉野と保昌が出て、吉野は自分が有明御前の身代わりになると言う。先ほどの器物はその意味をこめた謎であった。そこに有明が出て、守り刀を自身の首に突き立てる。保昌夫婦は悔やみ、是則は吉野への恨みをこめた自害であろうと有明に言うと、有明は「そうではない。思いがけず自分に代わって死のうとする吉野様へのかたじけなさゆえの自害」と言い、また「取り替えて育てた般若丸が、悪道積もって鬼神となり、今は大江山の酒呑童子とも呼ばれるものになったのも自分のせいである」と嘆く。それを聞いた吉野は、懺悔の告白をはじめる。「自分は実は人間ではない。むかし鈴鹿山で坂上田村麿に滅ぼされた鬼神の末裔である。先祖の報復のため、是則に近づいたが、恋に落ちて子までなすことになった。般若丸が鬼神となったのも、母の本性を受け継いだから

である」と嘆く。有明は、互いに心明かし合う上は思い残すことはないが、一目我が子に会いたいと言う。吉野が一間（ひとま）に向かって呼びかけると、まさかりをかついだ怪童丸が出てくる。吉野が「あの有明様がお前の本当の母様」と言うが、怪童丸は「かか様じゃない」と言う。式部が「そう言うも尤も、なじみのお袋様はそこに」と吉野の方へ押しやるが、怪童丸は「こちらもそうじゃない。本当のかか様どこへ行った」と言う。吉野はここに来るために姿を変えたからと言って、額に角の生えた鬼女の姿を現す。そして怪童丸に「あちらが本当のかか様。おそばへ行って暇乞いせよ」と言う。怪童丸は有明のそばで「かか様であるはずはないが、それでもなぜかお前の死ぬのが悲しくて、涙が止まらない」と嘆く。それを聞いて、有明は喜んで息絶える。怪童丸は坂田公時と名を改め、頼光に仕えることになる。吉野は「まだ成長するまでは怪童丸を預かり、伊豆の国の足柄山で育てる」と言う。

有明御前（正妻）
═══┬═══般若丸（酒呑童子。実は吉野の前の子）
坂上是則　　（出産時に取り替えられる）
═══┬═══怪童丸（実は有明御前の子）
吉野の前（妾。実は是則の先祖、坂上田村麿に滅ぼされた鬼神の末裔）

平井保昌（源頼光家臣）
═══
和泉式部（もと坂上是則に歌の指南を受ける）

以上、このように酒呑童子（般若丸）と坂田公時（怪童丸）の出生の秘密が明かされるのがこの保昌屋敷の段（五段構成に直すと三ノ切に当たる。正本の「浄瑠璃太夫役割」では五段の分割が示されている）であり、その内容自体は十九世紀の創作ではなく、十八世紀半ばの『酒呑童子出生記』に拠っていることを押さえておきたい。

二、復曲資料と上演台本

今回の演奏に当たって、保昌屋敷の段の伝承曲の資料としたのが、淡路の三味線奏者、豊澤町太郎（一九〇二～八七）師の残した弾き語りの録音テープである。これは昭和四十年代（四十六年以降）に早稲田大学演劇博物館の依頼によって淡路のみに伝承された浄瑠璃を町太郎師が（一部は竹本朝之助師とともに）演奏して残した一連の録音の一つであり、それらの録音は演劇博物館に所蔵されている。その録音経緯については、内山美樹子氏が『浄瑠璃史の十八世紀』（勉誠社、一九八九）一九五・一九六頁に詳しく説明されているので参照されたい。二〇〇五年には南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館に豊澤町太郎師旧蔵資料が寄託され、その中にも含まれており（演博にはない録音も含む）、今回は淡路人形浄瑠璃資料館寄託の「保昌屋敷の段（切）」録音テープを利用した。「保昌屋敷の段（切）」がいつ録音されたのか正確にはわからないが、この一連の録音に関する内山氏と町太郎師とのやりとりについては、町太郎師の日記『豊澤町太郎日記』（七冊）にも確認することができる。

町太郎師の録音であるが、その内容はほぼ原作の通りである。町太郎師旧蔵資料には、『酒呑童子話』保昌屋敷の段の五行抜本や同段のペン書きの三味線譜本が残されており、町太郎師の語りは五行抜本のテキストに基づくものと思われる。一部に違いはあるが、読み違い程度の相違であり、特に意図的な改変は認められない。そこで、今回の上演台本は

原作の通り（五行抜本は原作通りである）とし、『酒呑童子話』正本の翻刻をそのまま利用することにした（別稿として掲出）。各語の読みについても、原作の読みを考証して、今回の演奏では町太郎師の語りとは一部変えたところがある。

次に曲についてであるが、竹本友庄、鶴澤友吉のお二人には、この町太郎師の録音とともに、参考資料として町太郎師旧蔵の譜本、及びその他の各種朱入り本（大阪市立図書館蔵・綱造遺文庫本や吉兵衛遺文庫本など）を提供した。町太郎師の録音曲と他の朱入り本の示している曲にはかなりの違いがある。ただそうした比較も行ったが、今回の演奏は最終的にはほとんど町太郎師の録音曲に基づいて演奏することになった。従って今回の作業は、三味線譜（朱）を利用して補曲を行うというような意味での「復曲」には当たらない。しかし今回の演奏は、伝承者からの直接の稽古によって習得されたものではなく、舞台録音ではない弾き語りの録音をもとに肉付けして復元演奏するものであり、また語り方も録音とは一部変更したところがある。例えば、『酒呑童子話』正本六十丁表七行目～裏二行目「左こそ有ラん怪しき本ゝ性包ミ隠すは尤ながら。最早始終を懺悔して。ちつ共恥らふ所でなし。今端の際に有リ明が願ヵひの程ももだしがたし。早く誠の姿を顕はし彼レに得心さすべし」は是則の言葉（『酒呑童子話』ではやや不明確になっているが、『酒呑童子出生記』を確認すれば明らか）であるが、町太郎師はこれを保昌の言葉として語っている。このような部分は語りに修正を加えるなど、基本的には町太郎師の語りに基づきつつ、演奏者と筆者とで本読みを行い、細部の語り方を確定していった。従って、その作業は広義の「復曲」であると言ってよいと思われる。

三、『大江山酒呑童子（酒呑童子話）』の伝承

『大江山酒呑童子（酒呑童子話）』の上演史については、【表1】上演年表（以下、「年表」）を作成して本稿末尾に掲げているので参照されたい。「年表」を見ると、本作は当初初演通りの『酒呑童子話』という外題で上演されていたが、嘉永四年（一八五一）以降、『大江山酒呑童子』という外題に変わったことがわかる。この『大江山酒呑童子』という外題が初めて現れてくる興行は、淡路の上村源之丞座によるものである。今回、上演台本は原作通りであるにもかかわらず、改題『大江山酒呑童子』を掲げたのは、淡路の伝承曲を淡路の太夫・三味線弾きが演奏するに当たっては、淡路座ゆかりの演題を用いた方がよいと考えたからである。

「年表」からわかるように、本作は近世期には二十五回、明治期には二十三回の通し上演が行われており、幕末明治期の人気作品であったと評することができる。同じく本稿末尾に【表2】『義太夫年表 明治篇』『義太夫年表 大正篇』収録興行による通し上演回数ランキングを掲げたが、実に『酒呑童子話』は『明治篇』で第五位（二十一回。「年表」と回数に相違があるのは、「年表」の方に『義太夫年表』未収録興行を補ったため）に位置している。しかし大正期に三回の通し上演が行われた後、昭和以降は大阪での上演が途絶えた。上演されなくなった要因は、主に次の二点にまとめることができるだろう。

第一に、本作が途絶えた理由は、大阪では昭和五年開場の四ツ橋文楽座以降、上演形式が見取りに移行し、基本的に通し上演が行われなくなったからである。本作の上演は、「年表」の場割欄からもわかるように、すべて通し上演であり、一部の段のみが取り上げられ、いわゆる付け物として上演されることはない（明治期に増補された戻り橋の段〈『増補大江山』〉を除く）。もし本作に素人浄瑠璃で語られるような段が含まれ

ていたら、見取り時代に入っても、その段のみ上演されるようなことがあっただろうが、そうした段がないので、本作の上演は途絶えたのである。

もう一つ、本作が上演されなくなった要因は、本作が人形の見せ場主体の作品であったからと考えられる。例えば大正五年四月御霊文楽座の『大江山酒顚童子』興行番付には、八瀬の里の段、源頼光館の段、羅生門の段、松太夫住家人身御供の段に「此処出遣早替りにて御覧に入候」の記載があり、多くの早替りの見せ場が設けられていたことがわかる。またそのうち羅生門の段では宙釣りも行われており、全体にケレンの見せ場が多い演目となっている。しかし、この時の宙釣り場面については、『浄瑠璃雑誌』の劇評に次のように評されている（『義太夫年表 大正篇』七三頁より引用。同頁に保昌屋敷の段の舞台写真があり、参考になる）。

人形にては栄三の顎の下に綱の顔が有る丈けにて栄三自身が綱に成て勤む。（玉蔵）は美女の間は人形で遣ひ、茨木童子と本性を顕はすに及び、自分が鬼の姿に成て宙釣り。綱を掴んで釣り上げ、雲の道具に色花火を使ひ、立派と云ひたいが、時代遅れぢや。未しも人形を遣ふて仕て呉れゝば見て居られるが、間狭い舞台に大きい体を見せ不映りにて見苦しかった。

この評のみならず、大正期以降、次第に娯楽の座を他に奪われ、古典芸術化していく人形浄瑠璃文楽にあって、総じてケレンの要素の評価は低く、舞台から排除されていく傾向にあった。本作は大正期に既に上演回数が三回に減っているが、それはこのような人形の見せ場が観客に歓迎されなくなってきたことも、一因となっているように思われる。

以上のように、大阪で『大江山酒呑童子（酒呑童子話）』が廃れた理由は、上演形式の見取り化と、人形のケレンの敬遠にあったと考えられるが、一方の淡路座では、まさにこの二点において大阪とは異なり、本作を昭和以降も伝承した。先に人形のケレンについて言及すると、淡路座は人形遣い主体の劇団であったから、いわゆる「七化け」に代表されるようなケレンの芸を売り物にし続け、それが今日に至るまで伝承されていることは周知の通りである。また酒呑童子の巨大な人形とその特殊な操法も、同様の意味で淡路座では大切にされてきた。そのことが昭和以降の本作の伝承に繋がったことは間違いないだろう。

そして二点目、上演形式に関しても、大正以降人形浄瑠璃の人気に陰りが見え、次第に淡路の座本全体が弱体化していく時代にあっても、基本的に淡路座は通し主体の上演形式を変えなかった。これについて具体的には、本報告書の別稿「明治から昭和初期の淡路座興行記録―徳島の新聞記事より―」の記録をご参照いただきたい。更に付け加えると、淡路座は近世以来、それぞれの巡業先において、三日程度で次々に演目を差し替えていくような上演を行ったが、その形式も昭和に至るまで保持した。例えば、別稿に紹介した昭和十年（一九三五）七月十二日『徳島毎日新聞』朝刊の記事では、「上村源之丞／稲荷座九の替　稲荷座の上村源之丞人形芝居は連日好評九の替り狂言を十二、三両日左の如く上演する」として演題を挙げている。稲荷座における一連の興行において、実に九回目の演目差し替えに至っているわけである。公演場所が掛け小屋から劇場に移っても、基本的に淡路座はこのような上演形式を変えなかった。

これについては、例えば明治三十四年（一九〇一）、上村源之丞座の東京興行に関して、『東京朝日新聞』（四月十二日朝刊）の「東京座案内」記事の中に、次のような指摘があるのが興味深い（この興行に関する一連の『東京朝日新聞』の記事は【参考資料】として本稿末尾にまとめて掲載しておく）。

扨此狂言は如何なる物と思ひしに別段新作物にもあらず、芝屋芝叟梅野下風の作、比良嶽雪見陣立なり、切狂言は艶容女舞衣酒屋の段

といふ番附面であるを初日から三十三間堂棟木由来平太郎住家の段と差替へたり、九日よりの替り狂言も諸新聞には前が一谷嫩軍記、中幕日蓮記勘作住家、切狂言播州皿屋敷鉄山館として太夫の語場まで巨細に出て居るが、八日に勾欄（てすり）へ黒衣が出て漢語交りの口上には前狂言玉藻前、中幕白木屋、切は七変化（なゝばけ）の所作事と披露したり、斯うグラ〳〵と変るやうでは所詮諸君に御案内は出来ぬ、新聞も啌（うそ）口上も当にならずシテ見れば看板の日本第一云々（しかく）も覚束ないと思はるゝ

これは報道する立場からの発言であるが、このような上演形式に馴染みのない都市の観客にとっては、頻繁な上演演目の差し替えは少々当惑を覚えることもあっただろう。しかしながら、都市に拠点を持たない淡路座は、こうした江戸時代以来の上演形式をその後も長く続けたのである。そうした保守的な姿勢が、大阪の文楽とは異なる人形芝居の伝承を残すことにも繋がったと考えられよう。

以上、大阪の文楽と淡路座を比較したが、このような違いにより、『大江山酒呑童子（酒呑童子話）』は、最終的に大阪には残らず、淡路の方に残ることになった。本作は文楽と淡路座の近代の歩みについて考える際、格好の作品と言うことができるだろう。

おわりに

以上、本稿には今回の復曲の要点と、『大江山酒呑童子（酒呑童子話）』の伝承についてまとめた。右に本作は人形の見せ場が主体となっている作品であると述べたが、三ノ切の保昌屋敷の段に限って言えば、語りの面でも充実した聴かせどころの多い場面になっていると言うことができる。今回の復曲をきっかけに、今後人形入りで上演されることも期待したい。

【表１】『酒呑童子話（大江山酒呑童子）』上演年表

西暦	初演年月日	場所	劇場	上演外題	場割	備考
1806	文化03・12・27	大坂	御霊宮境内芝居	酒呑童子出生記	よし野山・北野やしろ・是則やかた・ひへの山・八瀬の里・大門口・綱伯母内・大内御殿・保昌やかた・頼光やかた・千丈嶽・大江山・鬼ヶ城酒宴・寝所	番付に「作者　佐藤太」とある。延享三年初演の『酒呑童子出生記』とは異なり、『酒呑童子話』のもとになったもの。
1814	文化11・02・22	大坂	いなり境内	酒呑童子話	御てん・吉野・北野・是のり・六郎次内・那須橋・ゑい山・八瀬の里・東寺・皇子住家・頼光やかた・御殿・保昌住家・羅生門・渡辺やしき・土ぐも退治・頼光山入・ふし事鬼ヶ城・大切童子退治	『酒呑童子話』初演興行。
1817	文化14・08・19	京	四条道場芝居	酒呑童子話	大内御殿・吉野山・北野社・是のり館・ひゑい山・矢瀬の里・東寺・王子館・頼光館・御殿・保昌屋敷・羅生門・綱屋敷・土蜘蛛・頼光山入・鬼が城・童子	
1820	文政03・02・24	大坂	いなり社内	酒呑童子話	大内御てん・吉野山・北野社・是則館・六郎次内・那須橋・比ゑい山・八瀬の里・東寺・王子御てん・頼光やかた・御殿・保昌やしき・羅生門・渡辺やしき・土ぐも退治・頼光山入・ふし事鬼が城・童子退治	
1825	文政08・02・10	大坂	道頓堀角丸芝居	酒呑童子話	大内御てん・よしの山・北野社・是のりやかた・六郎治内・那須橋・比ゑい山・八瀬の里・東寺・王子御てん・頼光館・御てん・保昌やしき・羅生門・渡辺やしき・土蜘退治・山入・ふし事鬼ヶ城・童子退治	
1827	文政10・08・13	大坂	堀江荒木芝居	酒呑童子話	大内・よし野山・六郎次内より那須川・ひゑい山・金沢堤・矢背・御殿・季武屋舗・羅生門・保昌やしき・土蜘・山入・童子退治	
1828	文政11・04・20	江戸	ふきや町肥前座	酒呑童子話	吉野山・北野・是則館・ゑい山・矢瀬・東寺・皇子館・頼光館・御殿・保昌屋舗・羅生門・渡辺屋舗・土ぐも・けい事山入・鬼城	
1828	文政11・08・08	名古屋	若宮芝居	酒呑童子話	吉の山・北の社・是則館・六郎治内・那須沢橋・ひゑい山・矢背・羅生門・保昌屋敷・丹州鬼がふち・	
1832	天保03・03・01	大坂	いなり社内	酒呑童子話	大内御殿・よしの山・是則やかた・比叡山・矢背の里・東寺・王子やかた・頼光館・御てん・保昌やしき・羅生門・渡辺やしき・松太夫住家人身御供・山入・ふし事鬼ヶ城・童子退治	
1833	天保04・03・14	大坂	北ほり江市の側芝居	酒呑童子話	大内・よしの山・北野やしろ・是則やかた・六郎次内・那須沢橋・比ゑい山・八瀬里・東寺・皇子御殿・頼光館・御殿・保昌やしき・羅生門・岩倉山一つ家・土蜘退治・山入・所作事・鬼ヶ城童子退治	
1836	天保07・02・04	大坂	座摩境内	酒呑童子話	よしの山・北野やしろ・是則やしき・六郎次住家・比ゑい山・矢瀬・王子御てん・頼光館・御てん・保昌やしき・羅生門・綱やしき・人身御供・山入・童子	
1840	天保11・04・26	大坂	稲荷社内東芝居	酒呑童子話	吉野山・是則館・市原野・比叡山・八瀬里・東寺・皇子御殿・頼光館・御てん・保昌やしき・鳥部山・頼光御殿・羅生門・渡辺やしき・山姥住家・景事山	

1840	天保11・10・吉	兵庫	兵庫常芝居	酒呑童子話	比叡山・矢背・頼光館・渡辺やしき	
1844	弘化01・07・吉	大坂	道頓堀竹田芝居	酒呑童子話	大内山・吉の山・北の社・是則館・六郎次内・那須沢橋・比叡山・八瀬・東寺・皇子館・頼光館・御殿・保昌やしき・鳥辺山・保助切腹・羅生門・渡辺やしき・松太夫住家・山入・鬼ヶ城	
1847	弘化04・01・吉	京	四条北側大芝居	酒呑童子話	大内・吉野山・北野社・是則やかた・六郎治住家・なす沢ばし・比叡山・矢背の里・東寺・皇子館・頼光館・鳥辺山・保輔切腹・御殿・保昌屋しき・羅生門・綱屋舗・山入・鬼ヶ城・童子退治	
1851	嘉永04・03・吉	兵庫	兵庫定芝居	酒呑童子話	吉野山・比叡山・八瀬の里・頼光館・御殿・保昌やしき・羅生門・渡辺綱やしき・頼光山入	
1851	嘉永04・11・01	名古屋	清寿院御境内	大江山酒呑童子	芳野山・北野・ひゑい山・矢瀬里・東寺・頼光御殿・羅生門・保昌館・大切山	淡路の上村源之丞座興行。
1854	安政01・02・吉	大坂	新築地清水町浜小家	大江山酒呑童子	大内・吉野山・北野社・是則館・ゑい山・八瀬・鳥辺山・頼光館・皇子御殿・保昌屋舗・羅生門・渡辺屋舗・人味御供・頼光山入・鬼ヶ城・童子退治	
1854	安政01・03・吉	大坂	新築地清水町浜小家	大江山酒呑童子	大内・吉野山・北野社・是則館・ゑい山・八瀬・鳥辺山・頼光館・皇子御殿・保昌屋舗・羅生門・渡辺屋舗・人味御供・頼光山入・鬼ヶ城・童子退治	前項と同一番付で、「二月吉日」の「二」を「三」と改刻したもの。
1859	安政06・05・27	堺	堺新地南芝居	大江山酒呑童子	吉野山・北のやしろ・ひゑい山・矢背ノ里・東寺・皇子御てん・弥三輔住家・頼光館・保昌やしき・羅生門・渡辺やしき・景事山入・鬼ヶ城	
1860	万延01・09・吉	大坂	座摩社内	大江山酒呑童子	大内・吉野山・北野社・是則館・比ゑい山・那須沢橋・八瀬・東寺・皇子御殿・頼光館・貞光忠義・鳥辺山・保昌やしき・羅生門・渡辺やしき・人味御供・土蜘・足柄山道行けい事	
1862	文久02・01・吉	大坂	いなり社内東小家	大江山酒呑童子	大序大内山・吉の山・北野社・是則館・叡山・八瀬里・皇子御てん・頼光館・奏聞・保昌やしき・羅生門・渡辺綱やしき・松太夫住家・山入・鬼が城・退治	
1863	文久03・09・11	大坂	堀江芝居	大江山酒呑童子	大内・吉野山・北野社・是則館・比ゑい山・那須沢橋・八瀬・東寺・頼光館・保昌やしき・羅生門・渡辺やしき・人身御供・頼光山入	
1865	慶応01・04・06	大坂	天満社内戎門小家	大江山酒呑童子	大内・吉野山・比叡山・八瀬ノ里・頼光館・保昌やしき・羅生門・渡辺綱やしき・松太夫住家・頼光山入・鬼神退治	
1865	慶応01・09・上旬	堺	大寺芝居	酒呑童子語	大序ヨリ大切迄	淡路の小林六太夫座興行。
1866	慶応02・10・10	京	四条道場北ノ小家	大江山酒呑童子	大内・吉野山・是則館・比叡山・八瀬・頼光館・保昌やしき・羅生門・綱やしき・松太夫住家・八条館・大切鬼ヶ城	
1867	慶応03・08・06	大坂	稲荷社内東芝居	大江山酒呑童子	大序大内・よしの山・北の森・是則館・比叡山・八瀬ノ里・鳥辺山・頼光館・奏聞・保昌館・羅生門・渡辺やしき・松太夫住家・足柄山	
1870	明治03・07・吉	大阪	座摩社内	大江山酒呑童子	大内・吉の山・北のやしろ・是則館・八瀬の里・皇子館・頼光館・御殿・保昌館・羅生門・渡辺やしき・松太夫住家	
1872	明治05･03･吉	大阪	松島千代崎町芝居	大江山酒呑童子	大序大内・芳野山・北野森・比叡山・矢瀬の里・奏門・保昌やしき・羅生門・綱やしき・松太夫住家	
1873	明治06･10･吉	大阪	道頓堀竹田芝居	大江山酒呑童子	大内山・吉野山・北野社・足利館・比叡山・八瀬・頼光館・保昌やしき・保助切腹・羅生門・綱屋敷・松太夫住家・土蜘	

1876	明治09･04･吉	大阪	松島芝居	大江山酒呑童子	大序大内・芳野山・北野の森・比叡山・矢瀬の里・奏聞・保昌屋敷・羅生門・源吾綱やしき・松太夫住家	
1877	明治10･01・吉	大阪	御霊表門元芝居	大江山酒呑童子	大序大内山・吉野山・八瀬の里・頼光館・保昌やしき・保助切腹・羅生門・綱やしき・松太夫住家・土蜘・衣洗・山入	竹本東玉など女義太夫の語りによる。
1880	明治13･03･吉	大阪	ばくろ町いなり北門小家	大江山酒呑童子	大内・吉の山・北の社・比叡山・矢瀬の里・源頼光館・保昌やしき・羅生門・渡辺綱やしき・松太夫住家	
1881	明治14･01･吉	大阪	松島芝居	大江山酒顛童子	大序大内評議・吉野山・北野神社・比叡山・八瀬の里・東寺・源頼光館・羅生門・平井保昌やしき・土蜘退治・源頼光山入･酒顛童子酒盛・童子退治	
1883	明治16･04･吉	大阪	松島芝居	大江山酒顛童子	大序大内評議・吉野山・北野神社・比叡山・八瀬の里・東寺・源の頼光館・門前・羅生門・平井保昌やしき・人身御供土蜘退治	
1883	明治16･09･吉	京	四条北側演劇	大江山酒呑童子	大序大内・吉野山・矢瀬の里・保昌やしき・羅生門・松太夫住家・荒血山	文楽座の興行。
1885	明治18･04･吉	大阪	御霊文楽座	大江山酒顛童子	大内評定・吉野山・加茂御社・比叡山・八瀬の里・東寺・源頼光館・保昌やしき・四ツ塚・羅生門・松太夫住家・土蜘退治・山姥住家	
1886	明治19･03･01	大阪	いなり彦六座	大江山酒呑童子話	御殿評定・吉野山・北野社・是則館・六郎治内・那須沢橋・比叡山・矢背里・東寺・皇子住家・頼光館・御殿・保昌やしき・羅生門・渡辺綱やしき・松太夫住家・荒血山土蜘蛛退治・山入り・鬼が城・童子退治	
1887	明治20･04･吉	大阪	御霊文楽座	大江山酒呑童子	大序大内・吉野山・比叡山・八瀬の里・源頼光館化粧・樺島保輔切腹・平井保昌やしき・四ツ塚・羅生門・人身御供土蜘退治	
1889	明治22･05･吉	大阪	御霊文楽座	大江山酒顛童子	大序・吉野山・八瀬の里・東寺・源頼光やかた・平井保昌やしき・羅生門・渡辺綱やしき・松太夫住家・人身御供	
1890	明治23･06･01	大阪	いなり彦六座	大江山酒呑童子話	吉野山・北野社・叡山花見・矢背の里・東寺・頼光館・平井保昌やしき・松太夫内・土蜘退治・羅生門・綱やしき	
1892	明治25･11･01	大阪	いなり彦六座	大江山酒呑童子	大序大内・吉野山・北野社・比叡山・八瀬里・頼光館・保昌やしき・羅生門・綱やしき・松太夫内・土蜘退治	
1894	明治27･04･17	大阪	御霊文楽座	大江山酒顛童子	大序大内評定・吉の山・矢瀬の里・東寺・源頼光館・袴垂保輔切腹・平井保昌やしき・羅生門・百姓松太夫住家・土蜘蛛退治	
1896	明治29･04･01	大阪	博労町いなり北門稲荷座	大江山酒呑童子	大序御殿評諚・吉野山・北野社・比叡山・矢瀬の里・保昌やしき・羅生門・綱館・松太夫内・土蜘蛛退治	
1898	明治31･05･吉	大阪	御霊文楽座	大江山酒顛童子	大序大内御殿・吉野山勝手明神阪上是則参詣・加茂社鳥居前・比叡山会合・矢瀬の里・摂津守源頼光館・平井保昌屋舗・東寺・羅生門・松太夫住家人身御供・荒血山土蜘退治	
1900	明治33･03･13	大阪	西区堀江遊廓明楽座	大江山酒呑童子	大序大内・吉野山・比叡山花見・矢瀬の里・頼光館・保昌屋敷・羅生門・一条もどり橋・綱屋敷・松太夫住家・荒血山土蜘蛛退治	
1902	明治35･04･吉	大阪	御霊文楽座	大江山酒顛童子	大序大内清涼殿評定・吉野山・加茂堤・矢瀬・東寺・源頼光館・袴垂保輔切腹・四つ塚・平井保昌屋敷・羅生門・松太夫住家人身御供	

1903	明治36･01･01	大阪	西区堀江明楽座	大江山酒呑童子	大序大内・吉野山・比叡山・矢瀬の里・頼光館・平井保昌屋敷・戻り橋・松太夫住家・荒血山	
1906	明治39･04･18	大阪	御霊文楽座	大江山酒顛童子	大序清涼殿評定・杣人六郎次住家・吉野山・加茂御神社前・八瀬の里・源頼光館・東寺・平井保昌屋敷・羅生門・松太夫住家人身御供	
1907	明治40･06･01	大阪	堀江市の側堀江座	大江山酒顛童子	大序吉野山・八瀬の里・東寺・源頼光館・戻り橋・平井保昌屋敷・松太夫内・土蜘退治	
1916	大正05･04･20	大阪	御霊文楽座	大江山酒顛童子	大序清涼殿評定・杣人六郎治住家・吉野山・加茂神社・八瀬の里・源頼光館・東寺・平井保昌屋しき・羅生門・松太夫住家人身御供	
1920	大正09･03･28	京	竹豊座	大江山酒呑童子	大序清涼殿・吉野山・矢瀬里・平井保昌屋敷・羅生門・渡辺綱屋敷・松太夫内・荒血山土蜘退治	
1924	大正13･04･01	大阪	御霊文楽座	大江山酒顛童子	大序清涼殿評議・杣人六郎治住家・吉野山・序切八瀬の里・東寺・羅生門・平井保昌屋しき・松太夫住家・土蜘蛛退治	

（注）増補の「戻り橋の段」（『増補大江山』）の単独上演は除いた。また国立文楽劇場で上演された『大江山酒呑童子』土蜘蛛退治の段や『金太郎の大ぐも退治』も加えていない。

【表２】通し上演回数ランキング

『義太夫年表明治篇』

順位	統一外題	上演回数
1	菅原伝授手習鑑	31
2	仮名手本忠臣蔵	30
3	絵本太功記	29
4	伊賀越道中双六	28
5	加賀見山旧錦絵	21
5	酒呑童子話	21
5	義経千本桜	21
8	妹背山婦女庭訓	20
8	木下蔭狭間合戦	20
8	八陳守護城	20
8	彦山権現誓助剣	20
12	伽羅先代萩	19
13	本朝廿四孝	18
14	玉藻前曦袂	16
15	ひらかな盛衰記	15
16	一谷嫩軍記	14
16	生写朝顔話	14
18	祇園祭礼信仰記	13
18	源平布引滝	13
18	碁太平記白石噺	13
21	鎌倉三代記	11
22	五天竺	10
22	三日太平記	10
24	花魁莟八総	9
24	双蝶蝶曲輪日記	9
26	三十三所花野山	8
26	日蓮聖人御法海	8
26	箱根霊験躄仇討	8
26	弥陀本願三信記	8
30	奥州安達原	7
30	恋女房染分手綱	7
30	新薄雪物語	7
33	鬼一法眼三略巻	6
33	夏祭浪花鑑	6
35	近江源氏先陣館	5
35	日本賢女鑑	5
37	太平記忠臣講釈	4
37	花雲佐倉曙	4
37	立春姫小松	4
40	金門五三桐	3
40	四天王寺伽藍鑑	3
40	日吉丸稚桜	3
40	妙法真伝記	3
40	嬢景清八島日記	3
45	契情小倉の色紙	2
45	大内裏相馬錦絵	2
45	浪花大汐譚	2
45	播磨潟浦の朝霧	2

『義太夫年表大正篇』

順位	統一外題	上演回数
1	絵本太功記	16
2	菅原伝授手習鑑	15
2	義経千本桜	15
4	加賀見山旧錦絵	13
4	本朝廿四孝	13
6	生写朝顔話	12
7	仮名手本忠臣蔵	11
7	伽羅先代萩	11
9	伊賀越道中双六	10
10	八陳守護城	9
11	一谷嫩軍記	8
12	彦山権現誓助剣	7
13	碁太平記白石噺	6
13	日吉丸稚桜	6
13	双蝶蝶曲輪日記	6
16	妹背山婦女庭訓	5
16	源平布引滝	5
18	鎌倉三代記	4
18	恋女房染分手綱	4
20	木下蔭狭間合戦	3
20	酒呑童子話	3
20	太平記忠臣講釈	3
20	玉藻前曦袂	3
20	ひらかな盛衰記	3
20	弥陀本願三信記	3
26	奥州安達原	2
26	祇園祭礼信長記	2
26	五天竺	2
26	三十三所花野山	2
26	日蓮聖人御法海	2
26	花魁莟八総	2

（注）『明治篇』『大正篇』とも上演回数１回のみのものは除いている。

【参考資料】明治三十四年（一九〇一）上村源之丞座の東京巡業

・明治三十三年（一九〇〇）八月十八日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

歌舞伎座にて明十九日より大阪登りの素人義太夫名人其鳳。三味線鶴澤叶一座の義太夫を興行し其打揚け後は井上理事の手にて上村源之丞一座の人形芝居を興行せん筈にて同人は其交渉の為四五日前同一座の滞在中なる北海道へ赴きし由なり

・明治三十四年（一九〇一）三月二日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

阿波の大人形元祖上村源之丞一座三十五名は来る十日頃当地へ乗り込み御目見得は得意の三十六段返しを演ずる由なるが場所は目下二三の劇場より交渉を受け居れば未だ何れの座とも極らざる由

・明治三十四年（一九〇一）三月八日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

阿波の大人形上村源之丞一座は東京座にて初御目見得を為す事に決定し来る十五日同座へ乗込む筈なるが当日は新趣向の乗込みを為す由

・明治三十四年（一九〇一）三月十四日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

東京座へ出勤の筈なる阿波の大人形上村源之丞一座の顔触は源之丞、鯉若、照三郎、鬼若、重吉、喜市、平左衛門、豊三郎、友平、喜代松、喜右衛門（太夫）越太夫、長門太夫、岩戸太夫、広太夫、要太夫、時太夫（三味線）又八、又造、三六外十数名なり

・明治三十四年（一九〇一）三月十九日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

東京座の人形芝居上村一座の乗込は延引して来る二十五六日頃となるべし初日は来月一日の予定なりと

・明治三十四年（一九〇一）三月二十八日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

東京座は愈々大人形上村源之丞一座にて来る三十一日開場と決し総一座三十五名は今廿八日同座へ乗込む筈御目見得狂言は「賤ヶ嶽」十幕の通しにて場割は

序幕明智左馬之助湖水渡り、二幕目清洲城評議、三幕目大徳寺焼香、四幕目施行、五幕目柴田勝家、六幕目中川清秀陣屋、七幕目足利家門前、八幕目勝家出陣、九幕目真左衛門（三十八段返し）大勢揃詰等なるが一座は源之丞、照三郎、鯉若、鬼若、重吉、喜市、平左衛門、豊三郎、反平、喜代松、喜右衛門の外別格として東京の西川伊三郎も名を列ぬる由又太夫は越太夫、長門太夫、岩戸太夫、広太夫、要太夫、時太夫、三味線又八、又造、三六外数名にて開場時間は午後十二時三十分より同九時までなりと

・明治三十四年（一九〇一）四月一日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

東京座の大人形上村源之丞一座の初日は来る五日頃の筈にて猶大切へ「艶容女舞衣」一幕を加へる由

・明治三十四年（一九〇一）四月五日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

東京座の上村源之丞一座は愈々本日正午十二時開場と決したり狂言は既記の「賤ヶ嶽七本鎗」「艶容女舞衣」にて役割は

序幕清洲城（伊勢太夫）二幕目施行（広太夫）三幕目大徳寺焼香（巴太夫）四幕目足利門前（岩戸太夫）五幕目中川砦（長門太夫）六幕目権六出立（広太夫）七幕目正左衛門庵（越太夫）八幕目勢揃ひ（総掛合）大詰柴田砦（長門太夫）二番目酒屋（越太夫）

・明治三十四年（一九〇一）四月六日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

東京座の人形芝居は昨日総幕出揃ひとなりたる由にて狂言は五日目毎に差替へ来る十日より他の新物を演ずると

・明治三十四年（一九〇一）四月十二日　東京朝日新聞　朝刊

東京座案内

一筆啓上仕候と至て古風な名乗を挙て阿波はで出たるヲツトキタリ現れ出たる浄瑠璃大人形上村源之丞の一座、

日本／第一／冠諸芸諸能　藤原／正清／上村日向掾　元祖　本家／上村源之丞

といふ厳格看板で浄瑠璃は豊竹鶴澤、人形遣いはづらりと上村一派、演題は即ち賤ヶ嶽七本鎗、アー肩が張た、何にしても恐しさうな物だから先賤ヶ嶽の四五本鎗計り済だ所へ去る八日の午後二時頃時を計つてノン〳〵ズイ〳〵と劇場を目がけて押寄せたり、扨此狂言は如何なる物と思ひしに別段新作物にもあらず、芝屋芝叟梅野下風の作、比良嶽雪見陣立なり、切狂言は艶容女舞衣酒屋の段といふ番附面であるを初日から三十三間堂棟木由来平太郎住家の段と差替へたり、九日よりの替り狂言も諸新聞には前が一谷嫩軍記、中幕日蓮記勘作住家、切狂言播州皿屋敷鉄山館として太夫の語場まで巨細に出て居るが、八日に勾欄へ黒衣が出て漢語交りの口上には前狂言玉藻前、中幕白木屋、切は七変化の所作事と披露したり、斯うグラ〳〵と変るやうでは所詮諸君に御案内は出来ぬ、新聞も啌口上も当にならずシテ見れば看板の日本第一云々も覚束ないと思はるゝ、先体裁の御案内でもしやう、此の一座の人形は余程妙な遣ひ方で愁嘆場の女房役が泣て居るかと思へば良人の物語の内はフイト楽屋へ消て仕舞ひ又用のある時に出て来るといふ塩梅で少しも情がうつらない、観客が残らず盲人なら是でいゝかも知れぬが目も耳も達者では此人形誠に見悪く御座候だ、人を盲目にした仕方とは此時よりぞ始りけるとでもいひたい、そこで呼物の三十六段返しといふのは昔両国辺に出て居た千畳敷の覗き眼鏡といふやうなものでだん〳〵と紙戸を引て取りグツト奥に成ると芝居の滝の仕掛を見るやうに八角許りの廻るものが一角づゝ紙戸を替て見せるのだが併し子供は大歓び、浄瑠璃は又豊竹と名乗ては居れど義太夫節とは余程異つたもので暴々しい所は土佐浄瑠璃虎屋永閑などの流れではないかと思へり、爰が阿波の阿波たる所か、併し人形といひ浄瑠璃といひ最う斯様なものは此後再び観られもせぬ、聴かれもせぬ、細かに砕いて言はれもせぬ、何れ其内庚申の晩にでも緩々御咄可申候以上、

四月　日　阿波座鴉

愛読者諸君へ

・明治三十四年（一九〇一）四月十三日　東京朝日新聞　朝刊

「楽屋すゞめ」

東京座の大人形上村源之丞一座は明十四日まで興行の筈なりしが座方との意見衝突し一昨日限りにて俄に閉場したり尤も一座は更に深川座に於て来る十六日より開演する由

・明治三十四年（一九〇一）四月二十一日　東京朝日新聞　朝刊
「楽屋すゞめ」
深川座の大人形は尚一週間興行と極り本日より差替る狂言は「朝顔日記」「安達三」「三十六段返し」なりと

・明治三十四年（一九〇一）四月三十日　東京朝日新聞　朝刊
「楽屋すゞめ」
宮戸座の上村源之丞一座大人形は来月一日午後五時より開場、狂言は一番目「玉藻前旭袂」四幕　中幕「おしゆん伝兵衛」大切「九尾狐」なり

・明治三十四年（一九〇一）六月二十一日　東京朝日新聞　朝刊
「楽屋すゞめ」
上村源之丞一座の人形は源之丞一人淡路へ帰り跡の連中にて福島より仙台へ乗込みしと

公開報告会・演奏会（大阪市立大学大学院文学研究科プロジェクト）

伝統芸能の近代化とメディア環境

日　時：2018年3月24日（土）13:00～17:00

場　所：大阪市立大学
学術情報総合センター10階大会議室

研究報告　久堀裕朗（日本近世文学）　菅原真弓（日本美術史）
松浦恆雄（中国演劇）　海老根剛（表象文化論）

幕末・明治期の人気作が
ここによみがえる！

復曲演奏
素浄瑠璃

『大江山酒呑童子』保昌屋敷の段

竹本友庄・鶴澤友吉（淡路人形座）

参加無料
定員100名
（先着順）

（定員に達した場合は、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターホームページのニュース欄にて告知します。）

●参加ご希望の方は下記の要領でお申し込みください。

申込方法：電子メール・往復葉書によるお申し込み（1通につき1名）を受け付けます。住所・氏名（フリガナ）・電話番号を明記して下記宛にお申し込みください。折り返し「参加証」をお送りします。

申込締切：2018年3月16日（金）（必着）

申 込 先：〒558-8585　大阪市住吉区杉本3-3-138
大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター
「公開報告会・演奏会」係（往復葉書の場合、返信用葉書の宛名も必ずご記入ください。）
joruri@lit.osaka-cu.ac.jp
（メールの場合、必ず本アドレスからの返信を受け取ることができるアドレスよりお申し込みください。）

＊なおご記入いただきました個人情報は他の目的には使用いたしません。

番付・人形かしら（金時）　南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館蔵

主　催：大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター（UCRC）
協　力：公益財団法人淡路人形協会（淡路人形座）

公開報告会・演奏会 「伝統芸能の近代化とメディア環境」

今年度、大阪市立大学大学院文学研究科ではプロジェクト研究の一つとして「伝統芸能の近代化とメディア環境」というテーマに取り組んで参りました。今回の催しでは、このプロジェクト研究の成果を広く一般の方々に公開すべく、研究メンバーが個々の課題とその成果についてわかりやすく報告します。

併せて、淡路人形座から演者を招き、現在は上演が途絶えた浄瑠璃作品『大江山酒呑童子』保昌屋敷の段を素浄瑠璃演奏でお聴きいただきます。本研究の一環として淡路人形座の協力を得て取り組んできた復曲です。

プログラム

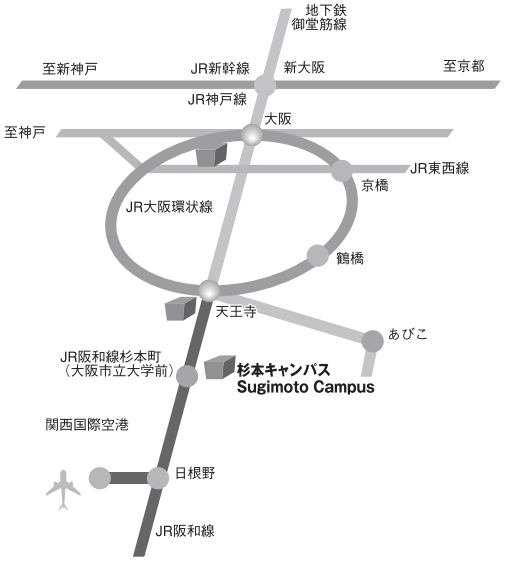
日　時：2018年3月24日（土）　13：00～17：00
場　所：大阪市立大学学術情報総合センター 10 階大会議室

報　告	文楽と淡路人形芝居の近代	久堀裕朗（文学研究科教授）
演目解説	『大江山酒呑童子（酒呑童子話）』	久堀裕朗
実　演	素浄瑠璃『大江山酒呑童子』保昌屋敷の段	竹本友庄・鶴澤友吉（淡路人形座）
	休　憩	
報　告	雑誌『歌舞伎新報』に掲載されるビジュアルイメージ	菅原真弓（文学研究科教授）
報　告	新越劇　劇団と観客の交渉史	松浦恆雄（文学研究科教授）
報　告	文楽とモダニティ：〈無知な観客〉の歴史にむけて	海老根剛（文学研究科准教授）

『大江山酒呑童子』は文化11年（1814）に大坂稲荷境内芝居（いわゆる文楽の芝居）で初演された作品（初演時の外題は『酒呑童子話（しゅでんどうじむかしがたり）』）で、有名な酒呑童子退治の伝説に取材した物語です。明治時代には大阪で実に21回も通し上演された人気作でしたが、昭和以降は上演が途絶えました。淡路の人形座は本作を昭和以降も伝承しましたが、残念ながら近年はその伝承が途絶えていました。今回は淡路の伝承曲に基づき、本作の保昌屋敷の段を復曲演奏いたします。

保昌屋敷の段は、五段構成の三段目切に当たり、源頼光の家来の一人で、和泉式部の夫でもある平井保昌の屋敷を舞台とする悲劇的場面です。頼光四天王の一人坂田金時や酒呑童子の驚くべき出生の秘密が明かされます。

会場アクセス



JR阪和線「杉本町（大阪市立大学前）駅」下車、東へ徒歩約5分
地下鉄御堂筋線「あびこ駅」下車、4号出口より南西へ徒歩約20分

●お問い合わせ　大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター事務局：06-6605-3114
（火・木・金曜日 10 時～ 17 時　※臨時に閉室することがあります。）
joruri@lit.osaka-cu.ac.jp（本催し申込み・問い合わせ専用アドレス）

「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書
『伝統芸能の近代化とメディア環境』

平成三十年三月三十一日発行

編集　久堀　裕朗

発行　大阪市立大学大学院文学研究科
　　都市文化研究センター
〒五五八―八五八五
大阪市住吉区杉本三―三―一三八
電話〇六―六六〇五―三一一四

印刷　博進印刷株式会社
〒五五九―〇〇〇二
大阪市住之江区浜口東二―七―二四